
しのでないけどしのである

えつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しのでないけどしのんでる

【Nコード】

N0496Z

【作者名】

えつ

【あらすじ】

「安土城に忍びこんで織田信長の私物を一つ盗んでくること。特にフンドシにはポーナスがつかます」それが忍びの里の卒業試験。できるだけ卑怯で姑息な手段を使ってライバルたちをなぎ倒しましょう。時代考証とかいろいろ適当です。HPにも掲載しています。

MISSION 1 「城門を突破せよ！」

「安土城に忍びこんで信長の私物を一つ盗んでくること。特にフンドシにはポーナスがつきます」

これを忍びの里の卒業試験とする。

早朝の青空の下。

教師の言葉に卒業生たちはざわめきたった。

「ポーナスって現金ですか？」

「金ではありませんが、いくら大金がもらえるようになります」

「どうやって信長の私物だと鑑定するんですか？」

「企業秘密ですが、できるだけ自分たちで証拠をそろえるようにしたほうが卒業後の就職率がアップするかもしれません」

「バナナはおやつに入りますか？」

「土でも食ってる」

「信長の物であればなんでもいいんですか？」

「なんでもいいです。ただし、入手困難なものほど高得点なのはいうまでもありません。なお、殺されようが捕まろうがこちらは一切責任をとらないし助けにも行かないのでそのつもりで。できなかつたら留年です。特におめおめと手ぶらで帰ってきたものは公開処刑します」

「ヒイイ……！」

「鬼！」

「人でなし！」

悪魔とクラスメイトたちの会話を聞きながら、小太郎はぼうつとつたっていた。

おそらく、ポーナスは大国への就職斡旋だろう。平凡な出来であると自負する小太郎は、高望みする気がない。田舎の小国か小金もちにでもつかえられればそれでいい。したがってフンドシには手を出さず、手堅く信長の将棋のコマでも狙うのがいいだろう。そうし

よう。

一人侵入プランを立てていたら、

「欠席者は二人だけなのにだれかたりないと思ったら、こんな所にいたんですか」

教師がこちらにやってきた。

「出欠なら、さつき名前を呼ばれたときに返事したはずですが」

「あなたの声、特徴がなさすぎて印象に残らないんですよ。顔も名前も平凡だし、体型も中肉中背で性格もありきたりだからほんと記憶に残らなくて」

「いじめでしょうか？」

「いいえ、褒めてます。忍者は目立ってはいけない。あなたのそのありえない存在感のなさは貴重なものです。きっと優れた忍になれることでしょう。期待していますよ」

「先生……」

優しいこともいえたんですね。初めて知りました。

「で、名前なんでしたっけ？」

「小太郎です」

忍びの里を出て二時間ほど。

安土城に到着し、小太郎は近くの木の上に身をひそめた。

基本的には黒い忍び装束で夜間に活動するのだが、今は昼間なのでまっ白な忍び装束に身を包んでいる。草や土で適度に汚れているが目立たなくていい感じ。そのかいあってか頭に鳥の巣を構築されつつあった。

目の前には堅牢な城がそびえ立っている。

見はりの数も多く、侵入するだけで骨が折れそうだった。どうしたものかと頭をひねっていたら、武士が門へ近づいていった。

「さて！ 見ない顔だな。名を名乗れ！」

左右に立つ二人の門番が槍をクロスさせ、道をふさぐ。

「拙者、本日より城に仕官することになった小早川一衛門でござる」
おや、どこかで聞いた声だ。

「ならん！ 今日は何れも通すなど殿からのお達しだ！ 後日出な
おせ！」

「ちいつ、バレたか！」

なんと、クラスメイトが武士に変装していたらしい。

武士はぱつと服をぬぐと元の忍び装束にもどり、ぬいだ服を門番
たちに投げつけて城内へ走った。

「侵入者だ！ であえ、であえーっ！」

ずどどどどどどどど、という地響きとともに城内から大量の武
士が駆けつけ、クラスメイトを追っていった。後には盛大な砂ぼこ
りと、元通りいずまいを正す門番たちが残る。まだ入り口なのに、
ここはなかなかの難所のようにだ。

壁をよじ登って侵入したほうが楽かもしれないな、と固唾を飲ん
でいたら、

「あれ、小太郎くん？」

いきなり下から声をかけられ、とつさに木から飛びおりて相手を
羽交い絞めにし、小太刀をつきつけてしまった。が、それは素早く
外され、あつという間に背負い投げをくらう。

地面にたたきつけられてのびていたら、笑いながら顔をのぞきこ
まれる。

「ひどいなあ。ちゃんと名前を呼んだのに、攻撃するなんて」

すずやかな切れ長の瞳。

さらりとなびく黒髪を後ろにまとめ、頭巾の中に押しこんでいる。
細い体は黒い忍び装束に包まれていた。

「あ、すまない。半蔵だったのか」

いかつい名前だが、だれもがふり返るほど華やかな美少女だ。

こちらもクラスメイトで、歳は同じ14。小太郎の気配を感じと
れるレアな友人である。でもって成績も非常に優秀である。昼間で

黒い忍び装束は目立つと思うのだが、「白なんかダサイからやだ」とのことで、彼女は白を着たことがない。そういえば、同じ意見なのか、はたまたわざわざ白を買うのが面倒なのかはわからないが他のクラスメイトも白は着ない。便利なのに。

「正面から侵入するのは難しそうだぞ」

「どうして？」

さっきの光景を話すと、半蔵は整った顔でさわやかに笑った。

「小太郎くんなら大丈夫だよ。ほら、お先にどうぞ！」

んなわけあるか。忍び装束で城門へ進んだりしたらたたき出されるに決まっている。

抵抗したが、城門までどーんと思いきりつき飛ばされてしまった。

「く……っ！」

こうなったら力技で突破するしかない。

小太刀をかまえ、違和感に気づく。

忍び装束のうさん臭い少年が目の前に立っているというのに、門番たちがまったく警戒していないのだ。

「え？」

つい声を出すと、門番の一人がこちらを……いや、こちらを通りこして背後にいるもう一人の門番に視線をむけた。

「今なにかいったか？」

「いや、なにも。今日はいそがしくなりそうだな」

「まっただ」

こいつら、俺に気づいてない。

人に話しかけても無視されたり、手裏剣が自分の分だけ支給されていなかったり、自分の机を指さされ、「この席の人っていつくるの？」などと目の前で聞かれたことはあったが、まさかこれほどまでとは思わなかった。

「……」

にわかに精神的ダメージをくらいつつ、小太郎は余裕で城門を突破した。

バレぬなら、バレるまでやっちまえホトトギス。

それから小太郎は怒涛の開き直りを見せた。

城内でフラメンコを踊りながら女中とすれ違い、見回りする侍の頭からカツラを奪って床に置いてみたり、障子にでかでかと墨で落書きしたりした。

すべてスルーされた。

五分間ほど廊下のまん中で体育座りをしてすすり泣いたが、だれもなぐさめてくれないどころか侍女に蹴られ、「あら、ネコでもいたかしら?」とかつぶやかれてやめた。今は廊下の端にいる。

「なにをしてるんだい君は」

いつから見ていたのか、天井の板を外して半蔵が逆さまの顔をのぞかせる。

「半蔵。俺は裸で歩いてもだれにも騒がれないような気がしてきた」

「うらやましいよ。それより、君に頼みがある」

どうやら忍びの里の卒業生が侵入してくるとバレているようで、信長の私物が一箇所に集められ、嚴重に警備されている。

半蔵がその警備網を突破するのはたやすいが、問題は他のクラスメイトたちだ。城内にうじゃうじゃひそんでいる気配があるが、姿が見えない。みはりを倒している間に獲物を横どりされたり、倒した瞬間になだれこんできて獲物争奪戦になるのが心配らしい。

「もちろん勝つ自信はあるけど、卒業生は40人いるからね。何個かとり逃げされる危険がある」

「試験は1個もって帰ればいいんだろう? 別に少しくらいとられても」

「小太郎くんは欲がないねえ。私はファンドシ狙いなんだ。アレをとられちゃ困る……そういうわけで、その部屋を教えてあげるからファンドシとってきてくれない?」

「別にかまわんが」

二つ返事でうなずいて、その場所へむかった。

その部屋は入り口が三つもあり、どこにも見はりが二人ずつ立っていたが小太郎は彼らを素通りして普通に中へ入った。

中には信長の私物がどっさりと山積みになれ、二人の侍が口論している。

「えーい、勤務中に菓子を食うんじゃない！」

一人はクマ男、という感じの筋肉ダルマ。

相撲とりのような巨体で、素手だけで十分な攻撃力をもっている。うだ。

「えー、意味わかんないんすけど。まだだれも侵入者きてないし、まつだけなら菓子食いながらも問題ないじゃないですかー」

もう一人は二十歳そこそこ。背は高いが優男で、長い髪を一つに結わえている。この城にいる武士はみんな正服であるかみしもと長着を着ているのだが、この男だけは普段着のままだった。

「ばかもん！ 集中力が削がれるだろうが！ だいいち甘い菓子など……せめて塩にぎりにせんか！」

「ジジイの偏見うぜー」

優男がクマの口に和菓子をつっこむ。

小太郎はその横をすりぬけ、ガサゴソとフンドシを探していた。

だが、ない。

どこにも見当たらない。困って天井を見上げると、小声で半蔵がたずねた。

「どうしたの？」

「フンドシがない。ボーナス特典だし、違う部屋にあるのかもしれない」

しかたなく茶器を二つもって部屋を出ようとした、そのとき。

「へっくしー！」

うっかりくしゃみが出てしまった。

「うわ、曲者！」

「であえ、であえいー！ 賊がきよつたぞー！」
のんきに甘党と辛党について議論をかわしていた侍二人が小太郎に気づき、抜刀して襲いかかってくる。

気づいてもらえた嬉しさに涙ぐみそうになって、つい反応が遅れてしまった。とつさに後方へ飛んだものの、右手に刃が届きそうだ。あわや血を見るかと思っただが、とつぜん侍たちがぐにやりとへたりこんで失神した。

「気をつけてね。高レベルの者ほど君の気配を察知しやすいんだから」

半蔵が吹き矢で二人を仕留めたらしい。

「賊はどこだー！？」

「曲者だと！？」

「命知らずな！」

三つの入口でそれぞれみはりをしていた侍たちが六人、同時に戸を開けて押し入ってくる。

半蔵の吹き矢で二人倒し、残り四人は小太郎がみね打ちで気絶させた。

ひらりと天井裏からおりて吹き矢をしまうと、信長の茶器を一つ受けとつて彼女はいった。

「さあ行こう、信長を探しに」

「俺も君も信長の私物を一つずつ手に入れたことだし、信長を探す必要は……」

「なにいつてんの、これは保険にすぎないよ。私の狙いはフンドシ。そしてフンドシがここにはないということは、きっと信長自身が装備しているに違いないよ」

フンドシ連呼する美少女ってなんかヤダなあ。

しかもぬぎたてホカホカを狙っているというのだから、「おまえは一体どこへ行こうとしているんだ」と問いたくなってしまう。出世と大金に目がくらんでいるのかもしれないが、目を覚ませといたい。いえない。

「あれ？ その顔、もしかして手伝ってくれないつもりなの小太郎くん。たった今助けてあげたのに」

大して身長は変わらないのに、わざと少しかがんで上目づかいで顔を近づけてくる。うるんだ瞳は愛らしいが、あいにく小太郎は長いつき合いで免疫ができている。

「忍び同士で色じかけが効くか」

「おや残念」

けるっとして半蔵がはなれる。

「だが借りは返すよ。友達だしな」

「そうこなくちゃ」

半蔵はにっこりと満足そうに笑って再び天井裏へひっこんだ。

ほぼ同時に、外にひそんでいた大量のクラスメイト達が室内へ押しよせてくる。彼らによって信長の私物争奪戦が繰り広げられたが、小太郎はやはりだれにも気づかれず、無傷でその場を後にした。

MISSION 2 「明智光秀を倒せ！」

「信長を探すのはいいが……闇雲に探すには広すぎるぞ」

小太郎はひとまず人気のない方へと歩いていった。

この安土城は大変広く、部屋の数だけでも百以上。しかもそれが五階まであるのだ。隅から隅へしらみつぶしに探していたら、丸一日かかってしまう。

「そうだねえ。いったいどこへ隠れているのか……知っているような人物に聞きこみしてみようか。信長の奥方たちや、側近にでも。あ、侍は”曲者に情報をもらすくらいなら自刃いたす！”とかいって面倒くさそうだから奥方にしようよ」

半蔵からの提案で二人は大奥を目指した。

が、入り口のわたり廊下で小太郎がぎくしゃくと動きを止める。

「男子禁制のここに入ったことがバレたら、俺は頭から串刺しにされるかもしれん」

まっっているから半蔵だけで行ってくれ。

そんな訴えをふくんだまなざしを受け止め、半蔵は菩薩のように微笑んで突きとばした。

「君なら大丈夫だってば」
が。

「何やつ！そこを動くな！」

奥から侍が刀をぬいて駆けてきた。

「俺に気づいた!？」

「ふうん、入り口に高レベルの侍を置いて奥の女たちを守っているわけか……しかも複数じゃなく一人だけってことは相当強いな。がんばって、小太郎くん！」

半蔵が物陰に消える。

あれ？もしかして置きざりにされた？

シヨックを受けるひまもなく鋭い斬撃が襲ってくる。

「かよわき婦女子を狙うとはなんと卑劣な！ この明智光秀の目が黒い内は一步たりとも通さんぞ！ 黄泉で後悔するがいい！」

おおう、ご丁寧にも斬りかかりながら自己紹介されてしまった。これだから侍は面倒くさい。乱れ突きにされた刃をよけてよけて必死によけて距離をとって、ようやくその姿を確認する。

一言でいうと眉目秀麗な青年だ。きりりと引き締まった口とすずやかな目元に女性たちがキャーキャーいってそう。青と黒の甲冑が実に様になっている。

小太郎が小太刀をぬくと、明智は眉間のしわを深くした。

「おのれ、貴様も名を名乗れ！」

名乗る忍びなどいるものか。

小太郎は正面から突進し、斬りかかると見せかけて煙幕を投げつけた。いちいち高レベルを相手にしていたら命がいくつあっても足りないので、トンスラしようという腹である。白い煙が噴出すと同時に物陰に身をくらませる。が、直後すばやく首をわしづかみにされた。

「なに……！？」

そのまま高々と片手で持ち上げられる。どういう筋肉だ。

「ふん。視界が見えずとも気配を探るくらい造作もないわ。……さて、どうしてくれようか」

空いた片手をゴキヤゴキヤツと鳴らして明智の両目が妖しく光る。ちなみに刀はいつのまにか地面に突き刺していた。

「今ここで素性と目的を明かせば命は助けてやってもいい。まあ、信長さまの拷問を受けるくらいなら死んだ方が楽かもしれないが」

ゴキリ、と首にいつそう力をこめられ、気が遠くなりそうになる。「大変でございます！ 大変でございます！ お助けくださいませ」不意に大奥の方から侍女が駆けてきた。

つややかな長い黒髪を後ろで結わえた、見目麗しい美少女だ。透き通るような白い肌に細い首。華奢な体つきだが、出るところは出てしまる所はしまっているのが着物の上からもある程度うかがえる。

彼女は大きな瞳に涙をため、おびえたように青ざめていた。

「む、賊なら仕留めたぞ」

「また別の賊でございます。賊が姫さまを！」

苦しい。死ぬ。そろそろ死ぬ。あと一分くらいで。

「なんと！ 早く案内を……おまえ、見ない顔だな。どなたの侍女だ？」

「ほんの2、3日前に入ったばかりでございます。そんなことより早く姫さまを」

「はて。おまえのように目立つ女が入ったなら、噂に上りそうなものだが……」

「ああ、私怖いつ！」

「ぐはあっ!?!」

侍女が泣きながら抱きつく、なぜか明智はうめき声を上げて倒れた。がしゃーんと甲冑が床にぶつかる音が鳴り響き、けつと侍女が吐き捨てる。

「なれなれしく顔近づけてくんじゃねーよ。私は自分より顔が綺麗でお洒落な男なんか嫌いなんだよ呼びびじゃねーっての」

そうして、ゲホゲホいつている小太郎の肩を優しくなでた。

「遅くなってごめんね小太郎くん。侍女の着物に着替えるのに時間がかっっちゃって」

半蔵の変装だったことはうすうす気がついてはいたが。

「このタイミングで優しくされると、まるで俺が不細工でダサイといわれているようなんだが」

「やだなあ、小太郎くんは平凡顔でちよいダサ程度だよ」

ちなみに明智には眠り薬を打ったそうだ。

大奥。

そこは女の園。ぶっちゃんけた話が信長公のハーレムである。見初

められた姫や姫が産んだ子供たちなどが住んでいる。その中で信長の居場所を聞き出せそうな人物といえば、やはり寵姫だろう。ならば正室の濃姫かとも思ったが、あちらはママシと呼ばれた斎藤道三の娘。たやすく教えてくれるとは思えないのでパスし、寵愛されて二人の子供をもうけた吉乃姫きつのを狙うことにした。

「さようですか……私ならばたやすく白状すると、そう思われたわけですね」

不快そうにひそめられた眉さえも美しい。実年齢はわからないが多めに見ても二十代半ばほど。女盛りまっしぐらといわんばかりの色香であふれていて、とても子のいる人妻には見えない。その風情ときたら大輪の花のようだった。

小太郎は内心ちよつとドキドキしていたが、

「ええ、あなたにはお子がいますからね」

「ははうえー、このキラキラなにー？」

「ああっ、ひどい！ 子供を人質にとるなんて……！」

そんな場合じゃないので自重した。

吉乃姫を前に、乳母からさらってきた四歳児のぶただの信忠くんのぶただに小太刀をつきつけて半蔵がささやく。

「さあ、殿の居場所はどこですか？ 別に命を頂戴しようというわけではありません。フンドシをはぎとったらすぐ帰りますから」

「この子のおしめじゃ駄目？」

「駄目です」

「わ、私の夜着では？」

「いいと思う。」

「駄目です」

二人が交渉している間に小腹がすいてしまって、小太郎はもそもそと携帯食をかじりだした。

「どーせ気づかれてないんだし、これくらい許されるだろう。ところが。」

「あー、僕も！ 僕もおやつー！」

囚われの信忠くんがきゃっきゃと無邪気に手をのばしてきた。レベルなのになぜ小太郎に気づいているのか。そして目の前の刃よりおやつが気になるのか。

こやつ、将来大物になるぞ。

「ああっ、信忠！ 大人しくしていなさい。暴れてはいけません」

「そうですよ。うっかり刺してしまったら、赤子なんてすぐに死んでしまいますからね」

「この鬼畜……！」

おなご連中をよそに、小太郎は携帯食を信忠の目の前にかざした。

「欲しいか？」

「ちようだい！」

「お父さんがどこにいるか、教えてくれたらやろっ」

「ちちうえはねー、壁のむこうにいるんだよ」

「壁のむこう？」

「いちばん上の部屋のねー、かけじくをどんってしたらいけるのー」

「そおか。ありがとう」

「えへへー」

約束通りたいて美味くもない携帯食を彼にあげると、美少女と美女がこちらを信じられないといわんばかりの顔で見っていた。

「信忠……」

よよよと姫が泣き崩れる。

半蔵は小太刀をしまい。水飴をとりだした。

「こつちの方が美味しいよ」

信忠くんはぱくつと水飴をくわえ、こてんと気を失ってしまった。

「信忠！」

「眠っただけです。おやすみなさい」

半蔵が吉乃姫の後頭部に手刀をうちこんだ。

安土城の最上階。

城主の間の扉を開けると、そこには忍び装束の少年がいた。露出しているのは両目のみだが、おどおどキョロキョロした仕草と背中からキノコが生えていそうな気配は馴染みのものだ。

「や、やあ。君たちも、フンドシを、狙いに？」

同じ卒業生の一人、虎之介^{とらのすけ}。半蔵と同じく小太郎に気づくことができるレアな学友で、彼女の次くらいに成績がいい。すなわち体力も学力も優れているのだが、実家がかなりのスパルタで超人ぞろいなため、卑屈なくらい自信がない。この場所の情報さえ知らないクラスメイトたちがほとんどなのだから、自力でここにたどり着いただけでも誇ってよさそうなものだが。

「すまんが、半蔵がどうしてもフンドシが欲しいらしくてな」
「そこを通してくれるかな」

ちなみに彼女の腕の中では信忠がすやすや寝息をたてている。人質に使えるからと半蔵が連れてきたのだ。小太郎は彼女の敵にだけは回りたくない。

虎之介はびくりと震えたが、退かずに身構えた。

「……良い所に、就職しないと、兄者に、殺されて、しまう」
彼の手から五月雨のように手裏剣がふりそそぐ。

小太郎は小太刀でそれらを打ち落とし、身をかわしながら告げた。
「半蔵、ここは俺にまかせて先に行け」

ぶつちやけ信長と戦いたくない。一緒に行ったところで世に名高い鬼武將に太刀打ちできる自信なんかないし、同級生とじゃれている方がマシだ。

「ありがとう！」
彼女は速攻でかけじくをどついた。

かけじくのかけられた壁と床の一部がぐるりと回転し、半蔵と信忠を裏の隠し部屋へ移動させて元にもどる。

「躊躇ゼロか」
別に”気にするな！俺に構わず行けっ！”と熱血っぽく叫ん

でみたかったわけじゃないからいいのだが。謎の寂しさを感じていたら、真上から長太刀を構えた虎之介がふってきた。

「うわッ」

間一髪というところでかわすと、ドスツとたたみに長太刀が突き刺さった。虎之介はすばやく床を転げ、もう一つ腰に差していた小太刀をぬきながら斬りかかってくる。まずい。このままでは殺られる。せまりくる鈍色の切っ先が腹部をえぐる寸前、小太郎は外を指さしてさげんだ。

「あつ！ 咲夜さくやがすっぱだから廊下に！」

「エッ！？」

虎之介が金魚みたいな顔色で廊下をふり返る。

その横っ面を小太刀の鞘でぶったいた。容赦なく全力で。虎之介がふっ飛び、壁に衝突して床に落ちる。そのまま失神するかと思っただが、彼は息も絶え絶えといった様子で手をのばしてきた。

「さ、さ、咲夜さん、は……？」

咲夜というのは同級生のくのいちで、彼の想い人である。

何年か前に教室で、

「虎之介くんは勉強も体術もできていいなあ」

「そ、そそんな。僕、いつも、二位。ぜんぜんすごく、ない」

「なにいつてんの。二位でも十分すごいよ！」

なんて会話があつて以来、彼女がそばを通りがかつただけで高熱に浮かされたような顔をしている事くらい知っている。その場に小太郎もいたからだ。咲夜はおるか虎之介にまで気づいてもらえなかったが。いつも小太郎に気づくわけではない辺りが、半蔵と彼の差かもしれない。それはともかく。

「さっきのは嘘だ」

虎之介から魂がぬけた。

お通夜状態のその様子が少し哀れになって、口を開く。

「これは本当なんだが、一週間くらい前に咲夜が”彼氏が欲しい”とぼやいていたぞ。立候補したらどうだ？」

裏庭でおにぎりを食べていたらふらつとやってきて、小太郎に気づかずひとりごとをもらしていったのである。

「か、かか、彼氏なんて……」

虎之介はまっかになってゴロゴロのたうち回った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0496z/>

しのんでないけどしのんでる

2011年12月24日09時47分発行